

令和7年度 鴨川フォローアップ委員会

■開催日時

令和8年4月2日(木) 14時00分～16時00分

■開催場所

京都ガーデンパレス2階 祇園

■出席委員:8名(五十音順)

丘 眞奈美 (京都ジャーナリズム歴史文化研究所代表、歴史作家)

川池 健司 (京都大学防災研究所 教授)

川崎 雅史 (京都大学大学院工学研究科 教授)

北野 慎一 (京都大学大学院農学研究科 教授)

金田 章裕 (京都大学 名誉教授)【委員長】

佐山 敬洋 (京都大学 防災研究所 教授)

林 倫子 (関西大学環境都市工学部 准教授)

水野 歌夕 (写真家)

■議事内容

・「千年の都・鴨川清流プラン」の進捗状況について

・その他

〔 三条大橋－四条大橋間 右岸園路舗装の整備について
鴨川公共空間整備基本プランについて 〕

■議事録

<事務局からの説明>

(資料に沿って説明)

<質疑・応答>

【委員】

千年の都・鴨川清流プランに基づく河川改修について、大宮大橋付近が整備区間に含まれていないのは何故でしょうか。

【事務局】

河川整備計画における基本的な考え方としては、桂川合流点から七条大橋までの約 7.6km の区間を、鳥羽大橋までの約 3.0km と、鳥羽大橋から七条大橋までの約 4.6km の 2 区間に分けて整備することとしており、本プランでは下流側の約 3.0km を優先的に整備することとしています。

【委員】

エアコン室外機の景観対策について、長期間にわたって大きな成果が出ていなかった時期もありましたが、協力いただいた事業者に対して、何らかのインセンティブはあるのでしょうか。

例えば、協力企業を表彰するなど、モチベーション向上につながる仕組みがあってもよいのではないかと思います。

【事務局】

インセンティブとしては、1 台あたり 1 万 5 千円から最大 8 万円の補助制度がありますが、近年は補助に頼らず自主的に取り組む事業者も増加しています。

また、令和 7 年度から 8 年度にかけて、14 台の対策について調整を行っています。

なお、表彰制度は設けていないものの、納涼床協同組合の総会での紹介などを通じて取り組みへの評価と感謝を示しています。

【委員】

三条大橋から四条大橋間の園路舗装について、提示されている 3 案のうち、石畳風舗装については、目地の切り方を工夫することで、十分に石畳のイメージを表現できると考えます。実際に、同志社大学の山門手前においても同様の手法が用いられています。

また、目地を設けず、セメント系固化材に土系顔料を混合することで、土舗装のような外観を再現する手法もあります。

この場合、保水性による気化熱効果が期待でき、環境配慮の観点からも有効だと思いますので、保水性に関する評価については、現時点ではやや議論が弱いように感じました。

【事務局】

園路舗装については、耐久性に優れた石系舗装である 3 案を比較しながら検討を行っています。ただ、保水性という観点では検討しておらず、引き続き検討を重ねていく必要があると考えております。

【委員】

目地については、装飾で入れているだけであり、河川というのは、もともと蛇行しているものですので、道路のように整然とした石畳形状とする必要性は低いと思っています。

あまり石畳を意識しない、自然な形状とする考え方の方がよいのではないのでしょうか。

【委員】

三条大橋から四条大橋間の舗装について、資料では「デザイン性」や「景観」という言葉が用いられていますが、むしろ作為的な表現を抑え、自然な印象を重視する方向が望ましいのではないかと考えます。

これまで鴨川の風致や景観の歴史を振り返ると、戦前の改修以降、「自然的な河原」であることが基本的な考え方として継承されてきました。

その観点から見ると、案によってはやや人工的な印象を与える可能性もあり、必ずしも鴨川の本来的あり方と整合していないように感じられます。

できる限り人為的な介入を前面に出さず、河原としての原則を維持しながら、印象を大きく変えない形で舗装を検討されてはどうかと思います。

次に、下流側の拠点について、資料には自然的な空間づくりや水際の再生といった方向性が示されており、これまでも議論されてきた経緯は承知しておりますが、今後は自然ということについて、より踏み込んで考えた方がいいのではないのでしょうか。

例えば、上流部の整備は景観的に優れる一方で、維持管理に多大な労力を要するものとなっています。

これに対し、下流部においては、在来の生態系や地域の自然に即した、より持続可能な整備のあり方を志向することも重要であると考えます。

提示された計画を見ると、植栽を含め人為的な管理を前提とする要素が多く、長期的に維持していく負担への懸念も感じられます。

そのため、樹種や植栽配置の工夫などにより、より自然な印象を引き出すとともに、河川空間全体として生物環境に配慮する視点を持って検討することが重要だと考えており、下流部については、上流部とは違った顔を持たせるような方向性があるのではないかと思います。

【事務局】

「見た目が作為的にならないように」という点については、鴨川府民会議においても京都らしさを踏まえ、特別な意匠を施すのではなく、周辺環境に自然に調和させるべきとの意見があります。

今後は、従来の土系舗装に近い色味や質感を取り入れることで、できるだけ周囲と一体感のある自然な景観となるよう、引き続き検討していきたいと考えています。

【委員】

生物調査について、個別の種を見るとフナが大きく減少しているなどの変化が確認され、生物の専門家には意見を聴いているのでしょうか。

【事務局】

河川水辺の国勢調査については、「河川水辺の国勢調査アドバイザー」の助言を受けながら、進めており、今回の調査箇所については、優占種となっているオイカワやカワヨシノボリなどについて

ては大きくは変わっておらず、多様な環境に生息する種が多数確認されていることから、現時点では大きな変化はないとの評価を受けています。

【委員】

京都は、社寺に代表されるように、人の作為を感じさせずに自然と調和してきた点に京都らしさがあると考えています。三条から四条の景観も同様に、本当に自然というよりも、うまくつきあってきた自然といえます。

したがって、あまり完全に自然の風景にこだわりすぎるのではなく、京都らしさとしての「つくられた自然」のあり方について、違和感のないバランスを検討いただきたいと思います。

【委員】

私からは、二点について意見を申し上げます。

まず、防災教育についてです。

新聞記事で、河川改修の完成とともに、下鳥羽の自治会連合会が平成 25 年台風 18 号の教訓を伝える小冊子を自主的に作成されている点が印象に残りました。大変意義のある取り組みである一方で、ハード整備が進む中、ソフト面の防災対策はどうなっているのだろうかと疑問を感じました。

私が委員を務めている京都市の委員会で、昨年度「災害と妖怪」をテーマにしたシンポジウムを開催し、市民の皆様に大きな反響がありました。

日本では山崩れであれば「蛇崩」など、災害を伝承として語り継いできましたが、これは単なる昔話ではなく、現代にも通じる防災啓発の非常にわかりやすい方法だと思います。実際に、国交省のマイ・タイムラインの啓発でも防災妖怪を用いた動画が作成され、Youtube などで公開されており、非常に分かりやすく印象に残る内容でした。今後は、AI などの新しい技術活用や昔ながらの伝承との融合など、多面的な防災教育の取り組みが必要ではないかと感じました。

次に、流域全体での防災意識の共有について、鴨川上流域では、「自分たちのところで水をとめ、下流に迷惑をかけない」という意識をもって生活されてきており、これは流域全体を一つの共同体として捉える思想であったと思います。

平成 30 年台風 21 号では森林被害により大量の流木が発生しました。一方で、京都府が設置した流木止めにより、設置以降は流木による被害が抑えられたという声もあり、その重要性を改めて認識しました。

現在、貴船地域では「大地の再生」による山の再生も進められています。こうした上流域の取り組みを可視化し、下流域と共有することで、流域全体を一体として捉える防災意識の醸成につながるのではないかと思います。

ぜひ、上流と下流を結ぶ形での情報共有や意識づくりを進めていただきたいと思います。

【事務局】

京川橋下流の河川改修が完成した中で、過去の災害の伝承や防災意識向上を図ることが重要だと考えています。

また、上流域での取り組みが下流域の住民に十分に知られていないのが実情であり、今後は多様な手段を活用しながら、効果的な情報発信のあり方について検討していきます。

【委員】

作為的でない自然という考え方は非常に重要だと考えます。

上流部については造園家などの意見を踏まえて丁寧に作り込まれていますが、一方で下流部では過度な整備や管理を避ける方向が望ましいのではないのでしょうか。

具体的には、雑木を中心に、成長が遅く自然樹形がまとまりやすい樹種を用いることで、全体の景観を整えつつ、維持管理コストの低減にもつながると考えます。

また、初期から樹形がある程度整っており、大きく成長しにくい植栽を活用する方法も有効だと思います。

高木については治水上の制約があるものの、こうした考え方は今後の計画に積極的に取り入れていくべきではないのでしょうか。

黒川温泉の事例では、雑木を基本としたランドスケープの計画に基づき、周辺の山林との関係性も含めて全体をうまく整えています。

見た目には自然のままに見えますが、実際にはしっかりとした計画に基づいて整備されており、参考になると思います。

鴨川の下流部についても、作為的でない自然という考えのもと、具体的なランドスケープの計画を立てて、整備するのがいいのではないのでしょうか。

【委員】

鴨川の上流から下流にかけて、人が「少し川沿いを歩いてみたい」と思えるような空間づくりを進め、上流から下流まで連続して歩けるような導線が整備されることを期待しています。

土砂浚渫についてですが、これは令和元年度までの調査に基づき、令和2年度から7年度にかけて危険箇所から順次実施されてきたものと理解していますが、令和8年度以降については、これまでの実績を踏まえ、今後の整備方法に変更や見直しがあるのかお伺いします。

河床勾配や橋脚等の影響で、土砂が堆積しやすい箇所は継続的に同様の傾向が見られると考えられます。

また、環境への配慮から砂州を一部残して浚渫を行っているとのことですが、残した砂州が新たな砂州の形成を促す可能性もあります。それに伴う樹林化や植生の変化について、調査を実施しているのか、また樹木の伐採について計画的に行っているのかについても教えていただけますでしょうか。

【事務局】

浚渫計画は過去の実績に基づき策定していますが、土砂は再堆積するため固定的なものではなく、状況に応じて継続的に見直していく必要があります、河床勾配や橋脚の影響で堆積しやすい箇所については、同一箇所でも繰り返し浚渫を実施しています。

また、過去には河川内の土砂を全面的に撤去する対応がとられていたと聞いていますが、現在は、環境に配慮し、全ての土砂を撤去するのではなく、一部を残して浚渫を行う方針としております。

樹木については、初期段階での対応が重要であり、今年度は現地調査を踏まえ、重点的に伐採を行いました。

今後は、浚渫とあわせて、樹木を小さいうちに伐採するという視点を重視し、継続的に樹木伐採に取り組んでいきたいと考えています。

【委員】

市民目線という観点で考えてみると、鴨川では生き物観察や環境探検があるというような機会があるということは、とてもいいことであり、今後もこういった活動が継続されていくとよいと感じています。

その上で、現在の実施場所の状況や、今後の河川整備の進捗を踏まえ、下流側においても、親水性や安全性を高めた低水護岸を整備するなど、上流のみならず下流においても同様の活動機会が確保できるように、工夫を検討いただければと思います。

次に、上下流の接続については非常に重要であると感じています。

上流側では、例えば今出川から四条付近まで歩くといった整備や利用が考えられますが、さらに下流まで視野を広げると、サイクリングとしての活用も想定できるのではないかと思います。

そこで、自転車が鴨川においてどのように位置づけられているのか、交通手段として、あるいは観光の観点からどのように捉えられているのかをお伺いします。

また、現状では動線が部分的に途切れている箇所も多く見受けられることから、こうした「切断」を今後どのように解消していくのかについても、お考えをお聞かせいただければと思います。

最後に、京都府水位・氾濫予測システムについてですが、本システムは当時として先進的であり、河川断面や地形を詳細に反映することで、降雨量に応じた浸水発生箇所をリアルタイムに把握することができます。

鴨川については河川形状の大きな変化が少ないため、一定の降雨条件に対する上下流への影響は概ね推計可能と考えられます。

そのため、想定降雨(例:総雨量 300 ミリ)時の影響を事前にシミュレーションし、市の担当者や防災拠点関係者に共有することが有効です。

これにより、実際の予測時にも想定内として判断でき、安全な避難行動の確保につながることを期待されます。

今後、このようなモデルの活用について検討を進めることが望ましいと思います。

【事務局】

鴨川の連続性については、上流・下流の接続に加え、周辺河川も含めた広域的な視点で検討していく必要があると考えております。京都市や地域、他管理河川との関係も踏まえ、まち全体としての連続性という観点を重視しつつ、今後検討を進めていきます。

また、自転車利用については、連続性確保による利便性向上と安全面の懸念の双方の意見があり、今後の方向性はまだ決まっていません。

連続性を意識した整備を前提としつつ、空間の利用方法については引き続き検討が必要であり、自転車を含めた鴨川のあり方については、関係者とともに関後検討を進めていきます。

【委員】

鴨川府民会議などでも、自転車と歩行者の関係については意見が分かれており、なかなか結論が出ていない状況です。

また、水に親しむ教育や自然体験についても、実際に取り組んでいる団体はあります。

【事務局】

鴨川府民会議では、鴨川納涼や鴨川茶店、下流部でのイベント等の機会を活用し、来場者に鴨川に親しんでもらうため、チラシ配布や掲示、映像上映などの取り組みを実施しています。

また、今年度から京都府立京都学・歴史館において、鴨川の歴史や文化に関する情報発信を行っており、具体的には、かつての土地利用や役割などについて、周辺環境との関係も含めて紹介するパネル展示を実施しているほか、生物多様性の観点から外来生物や野鳥等に関する展示も行っており、生物多様性センターと連携した企画も実施しています。

展示期間は1〜2週間程度と短期間ではありますが、来場者から多くの質問が寄せられるなど関心も高く、一定の反響が得られているため、今後も継続していく予定です。

【委員】

私から3点あります。

1点目は、水位・氾濫予測システムについてです。

このシステムは、市町村が避難判断を行うための重要な情報基盤だと思いますが、市町村側でどのように受け止められ、活用されているのか、また、自治体職員への理解促進はどのように行われているのか、そして、利用者へはどのように発信するかということを教えてください。

2点目は、利用者の来訪状況についてです。

利用者がどの地域から、どの程度の距離や時間をかけて鴨川を利用しているかといったデータを把握することで、整備の効果や鴨川の魅力を評価する材料になると思いますので、今後検討していただきたいと思います。

3点目は、漁業関係者や河川利用者との情報共有についてです。
河川整備や生態系の変化について、内水面漁業関係者などの利用者側と、どのような情報共有や連携・意見交換が行われているのかを教えてください。

【事務局】

まず、水位・氾濫予測システムについてですが、大規模河川では予測と実績の相関が一定確認されている一方、小規模河川では局地的降雨の影響により予測が難しい課題があります。

予測精度は向上しているものの限界があり、断定的な情報も含まれるため、現時点では住民向けではなく、市町村の避難判断の参考情報として運用しています。

今後はシミュレーション結果等を活用し、必要性の理解促進を図っていく必要があると考えています。

次に漁業関係者や河川利用者との情報共有についてです。

河川水辺の国勢調査を実施する際には、漁業協同組合と調査内容や実施時期について情報共有を行っており、場合によっては、調査を同時に行うなど、連携を図ってきました。

また、魚を中心に活動されている団体の方々と、さまざまなイベントを通じて交流を図っております。

利用者の来訪状況の調査について、非常に興味深いご提案だと感じました。

現在は、河川行政の枠組みの中で、そこまで詳細な人流データを取得・分析する体制が十分ではありませんが、他部局では、既に人流データ等を活用した分析を行っている例もありますので、他部局の取り組みを参考にしながら、連携できる部分があれば検討していきたいと思います。

【委員】

遠方からの来訪者という点では、近年、外国人観光客の利用も非常に増えています。

その利用形態は、従来の府民・市民の利用スタイルとは異なる場合もあり、そうした方々に対しても、適切な説明や配慮が必要だと感じています。

【事務局】

近年、夏の鴨川では外国人利用者の割合が高まっており、防災情報や利用マナーの多言語対応が重要と考えており、大学生ボランティアの協力を得て、英語をはじめとする外国語対応を進めているところです。

今後は留学生などの力も活用しながら、さらなる充実を図っていきたいと考えています。

【委員】

大雨等のアラートについて、正直少し鳴りすぎて負担に感じる面もありますが、一方で上流の降雨状況や危険な状態が分かるようになり、上流の地域が身近に感じられるようになりました。

下流に住んでいても「今こういう状況なんだ」と理解できる点は大きな効果だと思いますし、流域が一体でつながっているという意識づくりにも役立つのではないかと感じています。

また、これからは想定を超える大雨や災害が起こる時代であり、京都は水に恵まれた都市である一方、水災害とも隣り合わせとなっており、その危険性がまだ十分に知られていない部分もあると感じています。

その中で、情報発信のあり方が、災害に対する市民意識の醸成にとって、重要なものになるのではないかと感じています。

【委員】

自転車計画については、現状あまり進んでいないという印象がありますが、安全に通行できる環境を整えば活用の可能性は大きいと思います。

すべての区間で対応するのは難しいとしても、座れる場所、歩く場所、自転車が通る場所といった機能分担を工夫することで、活用できる区間はあるのではないのでしょうか。

また、近年はスマートモビリティとしての自転車の技術開発も進んでおり、安全性の向上によって高齢者でも安心して利用できる環境を整えば、鴨川での活用の可能性も広がると感じています。

もちろん、新たな課題が生じる可能性はありますが、こうした先進的な考え方や技術を取り入れることで、都市としての価値向上にもつながるのではないかと思います。

現在はバス交通への依存が大きい状況にあります、その中で鴨川空間の新たな活用が進むことにも期待したいと考えています。

【事務局】

スマートモビリティとしての自転車活用については、三条・四条周辺のようにスペース確保が難しい箇所もありますが、今回の整備区間のように、自転車利用を整理したうえで認めている場所もあります。

そのため、「どこまで自転車を受け入れるのか」「どの区間で制限するのか」といった使い分けを行いながら、川の魅力向上と自転車活用の両立について検討する余地があると考えています。

こうした工夫により、利用者が上流側へ足を延ばすきっかけにもなり得ると考えており、すべてを一律に排除・制限するのではなく、場所ごとに適切なあり方を考えていくことが重要だと思います。